

静岡県で活躍する医師

日本一の僻地における総合診療医教育施設へ

西伊豆健育会病院 病院長

仲田 和正 先生

Dr. Kazumasa Nakada



東京からおよそ3時間、伊豆半島の西海岸に位置する西伊豆町に全国の名だたる病院から研修医が集まる病院がある。西伊豆健育会病院だ。当該医療圏の人口は約1万5千人、高齢化率は40%と国内平均の27%をはるかに上回り、最も近い三次救急医療機関までは1時間を要する。病床数は78床、診療科は内科・整形外科・泌尿器科・呼吸器外科・循環器内科・リハビリテーション科・皮膚科の7つと地域の要といえる病院だが、最先端の医療設備や研究施設が揃うわけでもない。国内に多くみられる僻地の病院といえる。

しかし、平成29年度に受け入れた初期研修医、専攻医は約40名と多く、これ以上の研修希望は残念ながら断わっている状況だという。

NHKの「ドクターG」にも出演し、自らも整形外科医として診療に加わる病院長、仲田和正先生に医師が集まる理由と今後の展開を伺った

常に知識は世界最先端 診療に役立つ知識を アップデートし続ける



現在、当院には全国から初期研修医や専攻医が来てくれるようになりました。北は北海道、南は福岡など本当に広域から学びに来てくれています。例えば亀田総合病院や名古屋医療センター、京都府立医科大学、麻生飯塚病院などの比較的有名な病院からも多数の医師を受け入れています。皆さん、先輩からの口コミを聞いて聞いて合わせてきて下さるようです。

実は、当院は2004年まではこの様な状況ではなく、他の多くの病院と同じように医師の不足に直面していました。契機となったのは、この年に発行した『手・足・腰診療スキルアップ(CBR社)』という整形外科診療の初心者向けの本です。これが判りやすいと評判を戴いて、少しずつですが医師が集まり始めたのです。

—どの様な本でしょう。

当初は研修医というより開業医向けに書いた本でした。これが若い医師に評判となり重版されて、現在までに累計3万部を発行しています。できるだけ図解を加えてわかり易く書きましたので医師のほかに看護師の方も読んで下さっています。

—現在の若手医師教育について教えてください。

まず、毎日のようにカンファレンスや勉強会を行っています。といっても堅苦しくないフランクな雰囲気のもので、週に2回は札幌医科大学と連携して、医局同士をオンライン会議のように接続し、双方の医師が参加できる



マンツーマンで行われる病棟巡回時の指導

カンファレンスを行っています。
 ― 同席させていただいたが、症状、既往歴、服薬歴、そのほか生活背景などを共有し、総合医が自分自身の考えを積み重ね、診断を導き処置を考えていくという実践的なものだった。大型モニターには、カルテや画像などのほか、参加者のコメントがリアルタイムで表示される。これにより西伊豆にいながら他院の総合医の習熟度も把握できるのかもしれない。

また内科症例検討会や骨関節鏡影レクチャー、そして若手医師が興味を持ったことを題材にした勉強会がありオンラインカンファレンスを合わせると週十回程が開催されています。このほか、外来診療や病棟回診もできるだけマンツーマンで指導するようにしています。診察やベットサイドの中からは、本来はもっと多くの情報を得ることができ

るのです。ですから、この情報をどのように引き出し、判断するのかを丁寧に教えています。
 ― 広報にも力を入れておられるとお聞きしましたが
 メーリングリストを発行しています。これには世界のトップジャーナルの「The New England Journal of Medicine」「The Lancet」「JAMA」の総説をまとめてわかりやすく掲載しています。また当院ホームページで人気のコンテンツ「西伊豆早朝カンファレンス」にも掲載しています。このホームページには月間で3,000〜4,000回のアクセスがあります。このコンテンツは「トップジャーナルから学ぶ総合診療アップデート（CBR出版）」として書籍化しています。



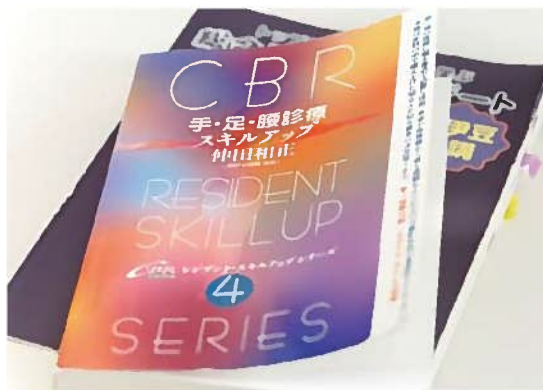
医学生時代に読破したという『ハリソン内科学』には書き込みが溢れる



カンファレンスに参加する研修医

病院の経営について
 ― 常勤医の4倍以上の研修医を受け入れていますが医師の負担は如何ですか？
 当院に限らずですが、若い医師が多いということは病院全体に活気が生まれます。彼らの前で格好の悪いことは出来ませんが、我々上級医も自然に教育熱心になります。今ではみんな教えたくり屋になっていますよ。負担などは思っていません。
 ― 病院の経営について教えてください。
 おかげさまで設立2年目からは黒字経営を達成しています。当院の特徴として私はメディカルディレクターという立ち位置で仕事をしています。ほかにマネージングディレクターという役割

者がいます。医療のことは私が、経営のことが彼が、完全に役割分担をしています。院長といえど勝手に買い物ひとつも出来ません(笑)
 オーストラリアの医学教育の例ですが、医学生を都市部と、いわゆる田舎に分けて実習させた場合、後者の方がその後の伸びしろが大きかったというデータがあります。このことから僻地での教育や研修が不利ということはありません。最新の知識は電子図書などで得ることも出来ますし、お話ししたようにインターネットも活用できます。
 研修医から言われて嬉しかったことのひとつに「魚の釣り方が判った」という言葉がありました。これは今後どの様に勉強し、経験を積んでいけばいいのか判ったという意味です。



仲田先生が執筆するスキルアップシリーズ

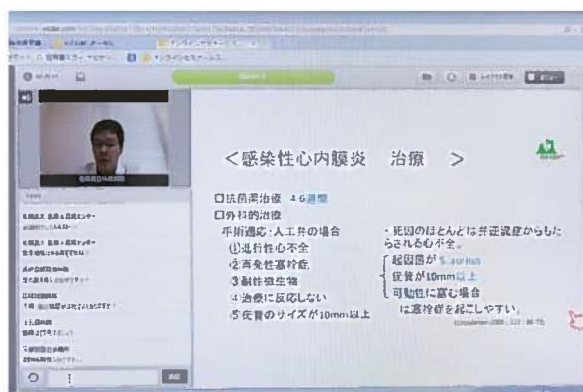


「今後、注力されることは？」
 当院を日本の「総合診療医教育施設」にしたいと考えています。当院は、新しく始まった新専門医制度のもとで、総合診療専門医プログラムの基幹施設となっています。広い伊豆半島では漁村や農村、市街地など、多様な生活圏を見ることが出来ますし、無医村では検診や巡回診療も行います。もちろん地域の開業医の先生方や大病院（順天堂大学医学部附属静岡病院）との診療連携も行っています。重ねて最新の知識を惜しみなく診療に役立てていただける研修のノウハウを揃えています。

将来の専門診療科として家庭医療・総合診療を考えている方は是非当院に見学に来て研修体制をご覧ください。



札幌医科大学とのオンラインカンファレンスの様子（毎回10名以上の医師が参加する）



オンラインモニターには、参加する各地の医師のコメントが次々と表示される

若手医師へのメッセージ

総合診療専門医プログラムへの参加者を募集しています。
 僻地といわれる西伊豆で最先端の研修をうけて、皆さんの目指す医療を
 実践すべく羽ばたいてください。

●略歴

- 1956年 静岡県生まれ 1978年 自治医科大学を卒業
- 1978年 静岡県立中央病院(現:総合病院)にて研修
- 1980年 浜松医科大学麻酔科、静岡県国民健康保険佐久間病院に勤務
- 1984年 自治医科大学大学院(整形外科)
- 1988年 市立島田市民病院 整形外科勤務
- 1991年 西伊豆病院 整形外科勤務
- 1992年 西伊豆病院 病院長就任



●取材を終えて

病棟の回診に随行させていただいて驚いたことは、ベットサイドでの「丁寧な診療」でした。患者さんとの目線の高さや日常会話にも気を配り、打ち解けた患者さんから必要な情報をピンポイントで聞き出す。その横では研修医がその様子を観察し電子カルテを入力する姿がある。病室を出るとすぐさま研修医にレクチャーする。先生の穏やかな声のせい、ゆったりとした時間に感じたが、その内容はとても濃いことに気がついた。